2004年4月20日発行 第94号 毎月1回20日発行
1995年9月25日 第3種郵便物認可

1010

銀海

2004.春

南海の国を彩る阿波踊りと藍の歴史

「架橋新時代」に入り阪神圏との交流が一段と加速

選抜阿波踊り大会

展望 ■ きょう・あす

阿波の国・徳島の名声を全国に轟かせているのが、あの「阿波踊り」だ。毎年8月の盆の時期、徳島市内の中心街はじめ、阿波路の町々はこの盆踊りで一気に燃え上がる。

囃子の調べがかき立てる強烈な2拍子のリズム。夜空にはじける「ヤットサー」の威勢の良い掛け声。群れとなり、波となって乱舞する連の踊り子たちの熱いパワーと、ほとばしる汗…。

明るい南海の潮騒の響きにも似たこのエネルギッシュな夏の踊りは、全国から大勢の見物客を寄せ集める一大観光イベントとしてすっかり定着するとともに、海外にも繰り込むほどの勢いで、いまや「世界の阿波踊り」に成長した。

ある年の夏、なんと北海道で「阿波の国」に出くわすという思いも寄らぬ不思議な体験をした。

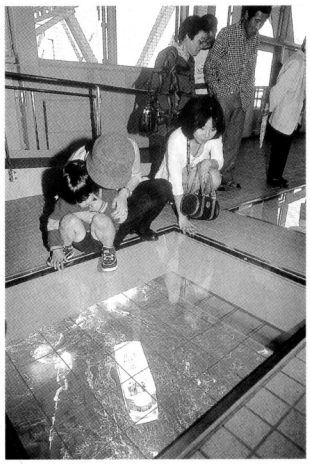
所は十勝地方の本別町という酪農の村で、その地区の小学校の校長先生が村の歴史を語りながら、1枚の写真を見せてくださったときのこと。写真は、学校の運動会でハッピ姿の児童たちが阿波踊りを愉快そうに浮かれて踊る姿を写したものだった。

明治の中頃、徳島市の南隣、小松島市から十勝開拓移民団がこの村に移住、原野を切り拓いて今日の大規模酪農・畑作地帯の礎を築いた。新天地に夢を賭けた阿波出身の先祖たちが、開拓の苦闘の中で望郷の念にかられたときに思い浮かべるのが、遠いふるさとの阿波踊りだったのだ。

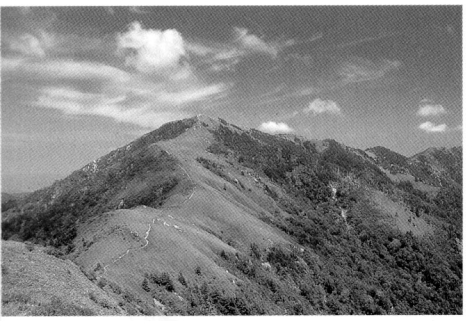
北海道の一地区でも脈々と受け継がれてきた阿波伝統の踊り。子どもたちのスナップ写真はささやかな情景ながらも、見方によっては観光ポスターなどよりも、それははるかに阿波の国の風趣を生きいきと伝える1枚であった。

徳島県は東側を紀伊水道に、南側を太平洋の海岸線にそれぞれ縁取られている。また、県北部の香川との県境には讃岐山脈が、県中央部には剣山地が、いずれも東西方向に峻険な山並みを形成している。

そして二つの山地に挟まれ、中央構造線と呼ばれる大断層地帯を西から東へ流れているのが、徳島県の母


渦の道

うだつの町並み


剣山

なる川、吉野川だ。四国一のこの大河は「四国三郎」の名でも知られ、親しまれている

蜂須賀家・徳島藩の城下町として吉野川の河口部に開けた県都の徳島市から、川を遡る格好で中・上流域の町や村を辿っていくと――。まず、北岸の道路に出ると、お遍路さんの往き交う姿に出会う。近くの鳴門市の霊山寺（りょうぜんじ）は、四国霊場八十八ヶ所巡りの第一番札所の寺だ。

四国三郎の流れが滔々と豊かな表情を見せる中流域あたりで、古い家並みを見せるのが脇町である。この集落はその昔、舟運を利用して阿波の特産物であった染料の藍の集散地として栄えた町で、商家風の家々に上がる卯建（うだつ）（2階部分の袖壁）の連なりに往時の繁栄が偲ばれる。

さらに上流に向かうと、県域の西端に池田町が控えている。少数部員の「やまびこ打線」で甲子園をたびたび湧かし、高校野球史上に残る夏・春連覇の全国優勝も遂げたことがある池田高校が、この山あいの小さな町の存在を日本中に知らしめた。

池田町を抜けると、吉野川は南に向きを変えてもう山中に分け入り、深いV字谷を刻んでいる。景勝地の大歩危、小歩危の渓谷をはじめ「かずら橋」がシンボルの平家落人伝説の秘境、祖谷地方も間近だ。

徳島県の母なる川は洪水をもたらす一方で、上流の山間部から膨大な土砂を運び続け、藍の栽培に好適な土壌を川筋の河畔中心に供してきた。江戸の世から明治末頃にかけて、その栽培は吉野川の中・下流域の平野部全域を埋め尽くし、阿波の藍は日本の藍生産の大半を占めていた。

すでに江戸期、藍の商いによる莫大な利によって、表高二十五万石の徳島藩の実質高は四十五万石にも及んだほどだ。さらに葉タバコや塩、阿波三盆（サトウキビを原料とする上質な砂糖）などの生産も奨励した。

阿波の国はまさしく特産物の豊饒の地だったのだ。藩政時代、その豊かさが阿波踊りや人形浄瑠璃の娯楽・文化を育んだと言える。

商業都市の徳島市。鳴門海峡の渦潮で名高い観光・海産物都市の鳴門市。港湾都市の小松島市。化学、電機、製紙工場などが立地する工業都市の阿南市。県東部の臨海地域にかたまるこれら4市は、共に大阪湾や紀伊水道を挟んで昔から阪神圏との経済的結びつきが強い。

大阪市内のビジネス街に「阿波座」という商いの場に因む町名が残っているのが、そのことを最もよく象徴している。四国4県の中でも徳島県だけが「四国のなかの近畿」と呼ばれるゆえんであろう。

94年の関西国際空港の開港や98年の本四連絡橋・神戸～鳴門ルートの開通によって、阪神圏との商流、物流活動は今日、より加速されてきている。工業製品のみならず、ホウレンソウやキャベツ、スダチなど野菜・果実の出荷を通じ、徳島県が京阪神への重要な農産物供給基地の役割を果たしていることも見逃せない。

県経済を産業構造面で見ると、高度成長期を通じて他府県からの企業誘致に頼りがちだったが、最近はIT関連やバイオの分野で県内勢のベンチャー企業が台頭、新しい産業の芽が出始めてきた。青色発光ダイオードの先端技術で急成長を遂げる企業も出現している。

県は「架橋新時代」を迎えたこの21世紀を展望して長期総合計画を策定しているが、それには「交流が広がる、にぎわう徳島」「産業が興る、力強い徳島」などを、基本指針に挙げている。

阿波■お国自慢ぷらざ

見る

四国八十八ヶ所

空海が歩いた道をあなたも歩いてみませんか？

約1200年前に若き弘法大師・空海が修行された跡をたどる、全長1400キロの巡礼の道です。徳島には一番札所・霊山寺から二十三番札所・薬王寺までが北から南へと続いています。

バスツアーや自家用車も便利ですが、お勧めは徒歩です。慌ただしい日常をいっとき離れて、四季折々の草花や深山の風景を味わいながら、無心に歩いてください。「同行二人」の道しるべが案内してくれます。

歴史を感じる寺々の建物、空海が修行したという断崖絶壁、沙羅双樹やお手植えのびらん樹、杉の大木、一期一会の人との語らいなど、きっと心に残る風景に出合えることと思います。

（徳島市・いのうえ眼科　院長　井上須美子）

吉野川

「四国三郎」と称される日本でも有数の大河川。全長194キロ、流域面積3750平方キロは四国全体の約20％にあたる広さを占める。源流は高知県北部の本川村の瓶ヶ森にある岩清水であり、これが始まりとなって四国一の大河になり、徳島平野を貫いて紀伊水道に注ぐ。

干潟とは、潮の満ち引きによって現れては消える陸地のことで、時間とともに、その姿は大きく変わるが、**吉野川河口干潟**の広さは65クタール、甲子園球場37個分に相当する。野鳥の楽園であり、これまでに160種類の野鳥が確認されている。

また、この干潟に住む生き物は、シオマネキを代表とするカニやシャコなどの甲殻類だけで15種類以上あり、ほかにも魚類や昆虫などの貴重な生き物が数多くみられる。

その吉野川河口から14キロ上流にあるのが**第十堰**。1752年に第十村（現・名西郡石井町）に設けられたことから第十堰と言う。宝暦2年に築かれた「お手堰」と呼ばれる下流側の堰と、明治になり新設された上流側の堰があり、全国でも珍しい二段堰となっている。現在、国土交通省により改築が計画されているが、賛成派と反対派の対立が徳島県下を二分しており、住民投票が行なわれたことでも有名である。

（徳島市・三木眼科　院長　三木　聡）

阿波踊り

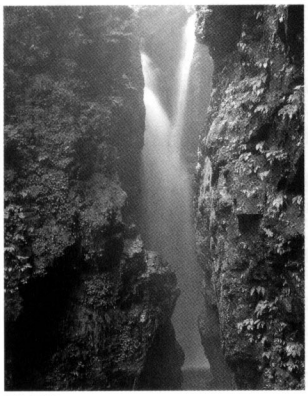
毎年8月12日から15日まで、市の中心部一帯を舞台として繰り広げられる徳島の夏の祭典。10万人以上の踊り子が、踊りのグループ（連）ごとに街を練り歩き、踊り子も観客も、夜遅くまで熱気に包まれる興奮の4日間。

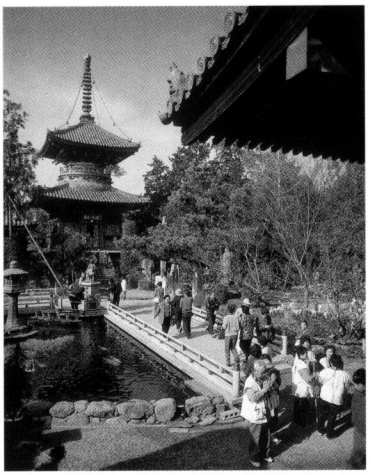
われわれ眼科医やパラメディカル、その家族も、「黒瞳連」として、目をデザインした揃いの浴衣を着て踊りに繰り出し、盛り上がっている。

（徳島大学　四宮加容）

眉山

万葉の詩人・船王によって万葉集にも詠まれた**眉山**。麓の**阿波おどり会館**からロープウエーで約6分で山


轟の滝


一番札所・霊山寺

奥祖谷二重かずら橋

頂に着きます。頂上からは吉野川の流れる徳島平野と大鳴門橋や紀伊水道が一望できます。

また阿波二十五万石、蜂須賀公の徳島城跡には**徳島公園**が整備され、徳島藩や蜂須賀公の資料などが展示されている**徳島城博物館**、桃山様式を今に伝える、枯山水と池泉回遊式を組み合わせた風情たっぷりの**旧徳島城表御前庭園**があります。

（徳島市・盛眼科医院　副院長　盛　隆興）

県西エリア

阿波の土柱は、氷河時代に堆積した扇状地が、その後隆起し、雨水の浸食を受けて形成された雄大な自然の芸術品。アメリカのワイオミング、オーストリアのチロルと共に世界の三大奇勝に数えられています。放浪の特異画家・山下清は「これは人間がつくったものとは違うんだろうな。わざわざつくるのは、ばからしいもんな」と言いながら、1枚の土柱風景を描いたといいます。県の北西部に位置する、吉野川の北岸沿いの阿波郡阿波町にあります。土柱を見ながら、ぐるりと1周の散歩ができ、適度な運動にもなります。

その阿波町の吉野川上流の隣町がかつて藍の豪商が軒を並べて栄えた脇町。隣家との境に「うだつ」という白壁の防火壁をつくり、これに立派な装飾を付けた瓦を張り、互いに権勢を競い合ったそうで、今も**うだつの町並み**として残っています。

一向に出世せず、まとまった財産ができない人のことを、「うだつの上がらない人」と表現されるようになったのは、この「うだつ」に由来するとのことです。ドキッ！

また、脇町にはシンビジウムの生産では全国の80％のシェアを誇る河野メリクロンのショールーム兼直売所・**あんみつ館**（☎0883-53-1187）があります。見るだけなら無料ですし、シンビジウム、胡蝶蘭、デンファレなどを直売ならではの特価で入手できます。お時間があれば、ぜひ一度お立ち寄りください。優雅な気分を味わうことができます。

（徳島大学　秦　聡）

日本三大奇橋で知られる**祖谷のかずら橋**は、シラクチカズラを編んでつくられ、3年に一度、架け替えられます。西祖谷山村と東祖谷山村の2か所あります。秘境ムードに浸りたいなら、観光客も少ない東祖谷の**奥祖谷二重かずら橋**がお勧めです。男橋と女橋の2本の橋があり、やぐらに乗ってロープをたぐりながら渓流を渡る「野猿（やえん）」もあります。西祖谷から車で約1時間（20キロ）です。また**西祖谷かずら橋**まではJR阿波池田駅からボンネットバスが出ています。

さらに吉野川に沿って国道32号線を走りますと**大歩危渓**があります。秋は紅葉、春には多数の鯉のぼりが吉野川の上を泳いでいます。遊覧船で川下りも楽しめます。

徳島県眼科医会ホームページに、**かずら橋ギャラリー**があります。お暇なときに、ご覧ください。

奥祖谷二重かずら橋から、さらに奥へ20分ほど車で走りますと**見の越**です。この付近は紅葉も綺麗です。ここから日本百名山のひとつ、**剣山**の登山リフトが発着します。リフトを降りて30分ほど登りますが、頂上付近の熊笹は見事です。

また、剣山を周遊するように日本一長い全長約88キロの**剣山スーパー林道**（無料、冬期閉鎖）があり、紅葉のポイントが散在しています。未舗装部分が多く、悪路を苦にしない2輪ライダーや4駆ドライバーが一度は走ってみたい憧れのコースとなっています。

■徳島県眼科医会ホームページ
http://www.tokushima.med.or.jp/gankaikai/

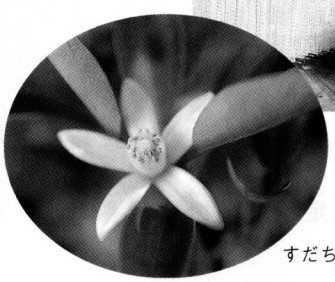
（徳島市・布村眼科医院　院長　布村　一元）

県南エリア

高知県と県境を接する県南エリアは、紺碧の太平洋を望む風光明媚な海岸線です。遠浅で海水浴に適している浜と、波が高くサーフィンで有名な浜を隣り合わせているのが面白い。また、アカウミガメの産卵で有名な**大浜海岸**沖には磯釣りのメッカである大島や、少し離れて国の天然記念物であるシラタマモが自生している池のある**出羽島**が見えて、風情がある。

さらに、四万十川を凌ぐ清流だと

半田そうめん



すだちの花

評される**海部川**の上流には日本の滝百選にノミネートされた**轟の滝**があり、国の天然記念物のオオウナギで有名な下流の**母川**へと続く。

（牟岐町・竹林眼科医院　院長　竹林　貢）

鳴門

鳴門と言えば、まず勇壮な渦潮を思い浮かべられるのではないでしょうか。**渦の道**は大鳴門橋の橋桁部分（道路の下）に設けられた450メートルの遊歩道で、床の一部がガラス張りになっていますから、その鳴門の渦潮を真上から見ることができます。大潮のときの渦潮は格別です。事前に電話で確認してください（☎088-683-6262）。

渦の道から歩いて約5分の所に、大塚製薬グループが設立した**大塚国際美術館**（☎088-687-3737）があります。原寸大で陶板に再現された古代から現代の西洋名画が1074点展示されています。国立公園の景観を損なわないように地下構造になっていますが、広いので体力をつけてから訪れられたほうがよいでしょう。車で来られる際には鳴門北インターで降りてください。

そのほかにも鳴門には、第九交響曲が日本で初めて演奏された所で第一次世界大戦時のドイツ兵の俘虜収容所跡である**ドイツ館**、四国霊場八十八ヶ所の一番札所である**霊山寺**、水瓶や鉢などの大物陶器が有名な**大谷焼**の窯元などがあります。大谷焼の窯元では予約しておけば焼物の体験もできますが、水琴窟の涼やかな音は、ぜひ聞いていただきたいものです。

（鳴門市・健康保険鳴門病院　部長　大村和正）

味わう

テレビ番組『くいしん坊！万才』でも紹介された、炭焼きステーキの**松阪**（徳島市籠屋町☎088-625-4465）は、最高級の松阪牛を炭火で焼いて余分な脂を落として食べさせてくれます。ご予算はヘレ・ロース会席で9000円から。

（徳島市・盛眼科医院　副院長　盛　隆興）

徳島で私がイチ押しのお寿司屋さんは**勝乃**（徳島市富田町☎088-623-7272）です。午前0時まで開いているというのが、ありがたいし、何と言ってもお刺し身とにぎりがおいしい。カウンターで食するのがオススメ。ご予算は、お一人5000円から。

（徳島大学　藤本裕子）

国道318号線を鴨島から香川県に向かって車で15分ほど北上すると、道沿いに「たらいうどん」の店が林立します。たらいうどんは、釜から茹であがったばかりのうどんを、すぐさま大きなたらいに移し、温かいだし汁につけて食べる、いわゆる釜揚げうどんです。サラサラと流れる渓流のすぐそばで、たらいに入ったうどんを大勢の人で豪快にすすっくのは野趣満点です。ちょっと太めの手打ち麺を、さっぱりした「じんぞく」のだしで味わいますが、器となるたらいが一層引き立ててくれます。

お勧めの店は、4畳半の桟敷が清流の山肌に寄り添って点在する造りの**平谷家**（板野郡土成町☎088-695-2262）です。夏期に、たらいうどんの醍醐味が最も満喫できます。冬期は**一天たらいうどん**（板野郡土成町☎088-695-2257）です。

うどんとくれば、ラーメン。人口27万人の徳島市は、中華そばまたは支那そばの看板を掲げる店が100店以上もあるラーメン王国です。味も、昼食時にご飯と一緒におかずとして食べる味付けの濃い「徳島ラーメン」系の店と、夜食として利用される胃にもたれないあっさりタイプの「支那そば」系の店に分けられます。

徳島ラーメン系を代表する店の一つが**いのたに**（徳島市西大工町☎088-653-1482）。新横浜ラーメン博物館にも出店した店で、昭和41年から営業しています。支那そば系の店はその名のとおり夜型営業の**よあけ**（徳島市二軒屋町☎088-652-3303）。薄味で、どこか懐かしいチャルメラの味が特徴です。

（鴨島町・糸田川眼科　副院長　糸田川誠也）

徳島市から車で1時間30分ほどの椿泊港の近くに**椿・活珍亭**（阿南市椿町☎0884-33-1077）があります。徳島県医師会報に「美味いもん屋」という人気シリーズがあり、そこに掲載されないかと恐れていました。あまり人に教えたくない隠れ家ですが、『銀海』読者のために特別に公開します。

藤江渡先生のおすすめで、初めて訪れたとき、何もつけない、何も足さない、ただ炭で焼いただけのアワビを一口噛んだとたん、ジワーと歯間に広がる旨みに思わずうめいたのです。時期、アワビの雌雄の選別、焼き加減が揃わないと出ない旨みです。それ以来、刺し身や生でもいける素材に手を加え、かえってまずく

するのは犯罪行為であると、深く確信するようになりました。

1万円のおまかせコースがおすすめ。その日に漁港に揚がった素材を生かした料理を堪能できます。完全予約制です。

もう一軒おすすめするのが、徳島市新蔵町にある**そば蔵**（☎088-655-1001）です。そばも美味ですが、ここで味わいたいのが「そば米雑炊」です。塩ゆでした蕎麦の実を干し、殻を剥く。殻を取ったそば米を白米のように炊くとぷりぷりした食感に仕上がる。ニンジン、ダイコン、鶏肉などと煮込んだものが「そば米雑炊」です。祖谷地方から広がった徳島を代表するヘルシーな一品です。

そば米雑炊は650円ですが、生そば、鯛にぎりのついた阿波御膳1650円や祖谷御膳2500円もあります。

（徳島市・布村眼科医院　院長　布村　元）

徳島市富田町界隈は古くからの飲食街です。なかでも旬の素材を十分に生かした懐石料理を味わえるのが**よのぜん**（☎088-624-3688）。さりげなく洋風の技も使われていて、ご主人の努力がしのばれます。毎日変わる手書きのお品書き。コース料理も良いですが、一品ずつ好きなものを選ぶのもおすすめです。予算は1万円前後。

また、籠屋町にも本格的な正統派の純和風懐石の店、**濱喜久**（☎088-655-6188）があります。新鮮な季節の素材を使った料理は上品な仕上がりで、見た目も美しく、贅沢を味わった気分になります。1万円コースがおすすめです。

（徳島市・医療法人三河眼科　名誉院長　三河隆子）

名産品

すだち

徳島の味覚を代表する「すだち」は、古くから徳島県の特産物として伝わる香酸柑橘です。さわやかな酸味と、すがすがしい香りで、夏の食卓を彩る味覚として欠かせません。

「すだち」は、搾って焼き魚や刺し身、寿司、そうめんなど何にでもかけてすっきりした酸味を楽しんだり、輪切りにして日本酒や酎ハイに浮かべたり、すって薬味に使うなど香りを楽しんだりします。

また最近では、柑橘系のさわやかな感じの焼酎「すだち酎」や、さわやかな風味にほんのり甘味があり、女性に好評の「すだち酒」など、すだち製品が多数開発されて、徳島県人にとどまらず全国のファンに愛されています。

（徳島市・藤江眼科　副院長　藤江　準）

ももいちご

徳島市の南西部に隣接する佐那河内村には「ももいちご」という特産物があります。四方を山に囲まれて寒暖の差が大きく、いちご作りに最適の環境であることを、大阪中央青果の会員によって見いだされ、共同開発する運びとなったのです。

「ももいちご」は、普通のいちごと比べて実が2～3倍と大きく、ひとくち食べたときの豊かな果汁のさわやかな甘味と果肉の柔らかさは、桃に引けを取りません。出荷は大阪に限定されており（大阪の㈱山岩商店☎06-6469-6333）、徳島県内で購入すると2日分鮮度が落ちます。1ケース20～24個入りで4000円前後です。

佐那河内村でしか作れない、幻の「ももいちご」を、ぜひ一度味わってください。

（徳島市・医療法人兼松眼科　院長　兼松誠二）

半田そうめん

国道192号線を徳島市から高校野球で有名な池田高校のある池田町に向かって車で約1時間半走った剣山の麓に、そうめんの里、半田町があります。町内には40余りの製麺業者があり、国道沿いにはそうめんの直販店が立ち並んでいます。

「半田そうめん」の特徴は、吉野川の澄んだ水と剣山から吹き下ろす寒風に育まれ、太めでコシが強いこと。スパゲティ風でほかの産地にはない一味違った手延べそうめんです。徳島県の代表的な特産品の一つになっています。

（鴨島町・糸田川眼科　副院長　糸田川誠也）

そば米雑炊

徳島に来られたら、ぜひお土産として買って帰っていただきたいのが「そば米雑炊」です。レトルトパックで出されていますから、お湯を注ぐだけで徳島の郷土料理を味わっていただくことができます。ゆうパックでも手に入ります。味がいいですよ。

（徳島市・徳島逓信病院　医長　片山智子）

鳴門わかめ、鳴門金時

鳴門は日本でも有数のわかめの産地です。激しい鳴門海峡の潮流にもまれて育った「鳴門わかめ」は、ま

さに海の野菜です。わかめには他の食品には少ないビタミンやミネラル、カルシウムなどの微量栄養素を豊富に含んでいます。また、体の中の脂分や老廃物を掃除してくれる効果があります。おでん、すき焼きなどの煮込み料理にも大変相性が良いですし、お刺し身としてもお召し上がりいただけます。定番のお味噌汁もはずせません。

また最近は、鳴門海峡のミネラルいっぱいの砂地で育った、さつまいも「鳴門金時」がすごい人気です。砂糖でも入っているのではと疑うほどの甘さとほっこりとした味わいは食べた人を幸せにしてくれます。

（鳴門市・うずしお眼科　院長　菅井哲也）

阿波藍

吉野川流域の肥沃な土地に「阿波藍」は育まれました。藍は秋に紅色、または白い穂をつける蓼科の一年草で、その葉を醗酵させた「すくも」から藍色の染料ができます。古く平安時代から始まったと言われる藍作は阿波藩に奨励、保護されて徳島の名産として発展していきました。その後、インド藍や合成藍におされた阿波藍ですが、その品質の良さから高い評価を受け、見直されています。

ハンカチなどの小物から着物（阿波しじら織）、そして現代の生活にも合うモダンな藍製品や藍染め和紙などが作られ、お土産として人気があります。

県内には「藍の館」や「藍染工芸館」をはじめ各地に藍に関する施設がありますので、昔ながらの藍染めを体験してください。

（板野郡吉野町・おおぐし医院　院長　大串淳子）

近況ファイル ■ 徳島県眼科医会

○地域医療活動

◆学校保健

学校医の仕事として、毎年、学期はじめの定期健康診断、秋の就学時健康診断があります。

学校保健担当理事は年1回の全国連絡協議会へ出席し、総会および眼科医会報によって、その年度ごとのテーマの会員への周知徹底を図っています。

また最近は健診のみでなく、より深く児童生徒の目の健康管理や保健教育のために、学校保健会への出席があります。保護者や教職員の方々に対しては不定期ながらも講演を行なっています。さらに、徳島市医師会との協力の下に色覚バリアフリーを目指して行政にも協力しています。

（副会長　大村和正）

◆目の愛護デー

10月10日の『目の愛護デー』関連事業を実施しています。

まずは、毎年9月下旬にテーマを決めて座談会を行ない、その内容を徳島新聞に掲載しています。

続いて、10月上旬の日曜日に『目の健康教室』を開催しています。本年度は10月5日でした。内容は「正常眼圧緑内障について」「ドライアイについて」の講演と、「目の無料健康相談会」の開催、さらに合間には徳島アイバンクから提供されたビデオも上映しました。健康相談会には毎年4名の医師に出務していただいています。

この事業は、先々代会長の福島義一先生の頃から継続されており、広く県民に親しまれています。本年度は約190名の県民の方々が参加されました。

（公衆衛生担当理事　中屋由美子）

○学術・学会活動

◆眼科医療従事者教育

徳島県眼科医会では、隔年で『眼科医療従事者講習会』を実施している。平成15年は17施設から41名の受講者が参加した。

計16コマの講義を5回の日曜日に分けて、徳島市医師会館および徳島県医師会館にて行なっている。また講義のほかに、徳島大学医学部附属病院の眼科外来をお借りして検査実習を1日行なっている。

受講生にとっては、基本的な知識や手技の習得以外に、他施設の受講生も同様に頑張っているということを感じていただく機会になっている。

（眼科医療従事者教育担当理事　板東康晴）

◆眼科医療フォーラム

平成13年9月から、四国地区の眼科医およびスタッフを対象に、眼科医療に関する講演と研修を行なうことを目的に発足しました。

特徴は、医師のみでなく多くの眼

会員の相互理解を図るため情報の共有化を最重要課題に

徳島県眼科医会
会長 布村（ぬのむら） 元（はじめ）

徳島県眼科医会の歴史は、1993年の『銀海No.135』に鎌田一一前会長が詳述されていますので、省略します。

会長に就任して、はや3年が過ぎようとしています。

就任直後の仕事は役員の人選でした。前執行部は全員が辞任し、まったく新しい組織をつくらなくてはならなかったのです。会員数（A会員：40名、BC会員：48名）からみると、かなり多い目の17名の役員を選びました。と言いますのは、役員になってもらうことで眼科医会活動に目を向けていただけたらと願ったからです。勤務医や女性医師の人数を増やし、また、内眼手術をする所もしない所も偏らないようにしました。さらには、圧倒的に多い徳島大学出身者だけで固めないようにも配慮しました。

最重点課題にしていることは『情報の共有化』です。難局に立ち向かうには会員の理解と協力が必要です。そのためには、情報の共有化は不可欠な要因です。

日本眼科医会本部からの情報は会長に集中しますし、事務局が移転して環境が整えば情報量は倍増するでしょう。そこで、情報を素早く会員に伝達できるようにメーリングリストとホームページを立ち上げました。

現在、「メーリングリスト」加入者は47名ですが、徐々に増えつつあります。ただ、会長からの一方的な情報の伝達だけでなく、もっと会員からの声が上がってくるのが本来の姿であると期待しています。

「ホームページ」は、会員向けだけでなく、眼科医会のメッセージを県民に伝えるよう更新しています。

ほかにも、広報として徳島県医師会報に眼科医会ニュースを毎月掲載していますが、オフィシャルな発言しか記載できません。そこで会員だけに通知したい内容を掲載するため、2年前から「徳島県眼科医会報」を年1回ですが発刊するようになりました。また昨年から、パソコンをしない会員にも連絡できるように「FAXネット」を導入しました。

より緊密な連携を図り、相互理解を深めたいと思います。

最後に、南海・東南海地震にそなえて、色覚バリアフリーなハザードマップ作成に向けて色覚検討委員会を設立し、地区消防局に協力していくことになりました。

科スタッフの参加をお願いし、眼科医療全般について考えていくことです。テーマは幅広く、接遇サービスや眼科医療経営、ロービジョン外来、ドライアイ、小児眼科などの講演を行ないました。次回は平成16年3月で、「緑内障」「ショック対策」を予定しています。

（学術担当理事　藤田善史）

○広報・親睦活動

◆ホームページ

『徳島県眼科医会ホームページ』を作成しようという布村会長の一言で、平成14年1月にスタートしました。全国の眼科医会でホームページを立ち上げているのは12地区ありますが、これからはインターネットの時代です。目の愛護デー、学校保健、徳島アイバンクのことなど、さらには疾患の解説と共に、県民の皆様に正確で役に立つ情報を発信しています。

また、会員専用掲示板も設け、会員同士の交流の場としても利用しています。

◆メーリングリスト

掲示板とは別に平成14年1月から『徳島県眼科医会メーリングリスト』をスタートしています。現在47名の

登録があります。

以前は、総会や理事会へ出席したときに得られる連絡や情報が多かったのですが、会長、理事、会員のメールで情報交換をするようになって便利になりました。さらに平成15年12月から他府県の徳島大学医学部眼科学教室同窓生も含めたOB会「黒瞳会」のメーリングリストも作成し、会員相互の情報交換を行なうようにしています。

（広報担当理事　藤田善史）

◆徳島県眼科医会報

徳島県眼科医会報を年1回発行しています。平成14年に第1号を発行し、最新号は第2号と、始まったばかりです。毎月発行されている徳島県医師会報に掲載される「眼科医会ニュース」に加えて、各種連絡協議会の報告などを眼科医会会員だけに通知するために眼科医会報の発行が望まれ、発刊に至りました。

内容は、理事会および各委員会の報告、掲示板には講演会のプログラムなど、また徳島大学だよりや徳島アイバンクの近況なども掲載しています。第2号から新規開業のお知らせや各先生方の趣味のページが始まり、内容がより充実してきました。今後が楽しみです。

（広報担当理事　水井研治）

表.徳島県眼科医会役員および職務分担

役職	氏名	職務									
		庶務	会計	社会保険	学術	眼科医療従事者	広報	公衆衛生	学校保健	医療対策	勤務医
会長	布村　元										
副会長	糸田川誠也	○									
	山根　伸太	○									
	大村　和正			○					○		○
理事	井上須美子		○								
	片山　智子										○
	兼松　誠二						○			○	
	内藤　毅										○
	中屋由美子							○			
	板東　康晴				○	○					
	藤田　善史				○		○				
	三木　聡									○	
	水井　研治						○				
	盛　隆興						○			○	
	矢野　雅彦				○						○
	山田　修三					○					
監事	竹林　貢										
	三河　隆子			○							
日本眼科医会代議員	布村　元										
予備代議員	山根　伸太										
社保審査員	大村　和正										
	三河　隆子										
国保審査員	鎌田　一一										
	保科　正之										
名誉会長	鎌田　一一										
顧問	三村　康男										
	塩田　洋										
	盛　重知										
	三木　敏夫										
	保科　正之										

◆勤務医部会

現在、勤務医部会の会員は48名です。毎年、勤務医連絡協議会で勤務医に関する諸問題が取り上げられていますが、昨今の社会情勢の変化に伴い、勤務医には、さまざまな問題が生じています。

本年からはFAX連絡網も完備しましたので、会員間の連絡を密にし、この難局を、いかに乗り越えていくか協力していきたいと思っています。

（勤務医担当理事　片山智子）

◆ゴルフコンペ

徳島大学の先々代教授の故三井幸彦先生が大変なゴルフ好きで、大学を中心に『目玉会ゴルフコンペ』を春と秋の2回開催してきました。現在54回を数えるまでになっています。しかし、最近は若い先生方にはゴルフは不人気のようで、参加者が減っているのが現状です。

そこで5年前から、ゴルフ好きの有志により、夏と冬に『目ん玉の会』としてゴルフの機会を増やすようにしております。会員の実力は、残念ながらシングルはいなく、誠に楽しい親睦活動です。

（副会長　山根伸太）